

# 韓国語話者の日本語アクセントの知覚研究

— 複合語アクセントの聞き取りについて —

鄭 樹 漢

## 1. はじめに

学習者が外国語として日本語を学習する場合、すでに習得している母語のアクセントを背景に日本語のアクセントを学ぶことがある。学習が進んだものでも日本語の正しいアクセントが身に付かず、いつまでも母語のアクセントの痕跡が残るという事実は、それほどアクセントの習得が困難であることを裏付けるものである。

今まで学習者を対象とした日本語の現状を論ずる研究は分節音に関する研究が多く、アクセントについての研究は数少ない。例えば、中東（1999）は34名の韓国人英語・日本語学習者について分節音を中心とした発音の調査・分析を行い、外国語音声習得には一定の傾向があり、母語の干渉が最も大きい問題だと述べている。アクセントについては研究があるとしても、単純語レベルでの研究がほとんどで、複合語アクセントについての研究はほとんど見当たらない。大西（1991）は、韓国語話者の日本語発話から－2型、－3型そして平板型の順に誤りが多いと分析している。ところが、実際には単純語だけでは会話は成り立たず、何かの形で複合語を使うようになる。日本語の複合語アクセントは単純語単独のアクセントとは全く違うアクセント規則が立てられているが、韓国語の複合語アクセント形式は、歴史的に見ても顕著な複合の様相を呈していないため、相当な日本語の会話能力を持っている学習者でも、複合語アクセントの区別と使い分けはなかなか身に付かない。また、鮎澤（1995）によると、学習者の学習歴によらない聞き取りの傾向があること、また、母語話者別に誤用パターンに有意差があり、同じ言語話者でもその生まれ育った方言によっても有意差があることが述べられている。

以上のことを踏まえながら韓国語の中でも日本語のような示差的アクセントを持つ慶尚道方言<sup>(1)</sup>の話者の日本語アクセントの聞き取り傾向について分析と考察を試みた。慶尚道方言におけるアクセントの型の区別は、日本語と同じように、声の上昇あ

るいは下降の時間的位置関係によって行われる（関1990）。

そこで本稿では、学習者は日本語の複合語をどう理解し、どう聞いているかを調べ、さらに学習者の母方言アクセントがどういう影響を与えるか、またアクセント学習においてはどういう難点があるかといった点に焦点を絞って考察する。

## 2. 方法論

### 2.1 研究目的

- ①学習レベルの違う2年生と3年生が聞き取るパタンにおいて相違があるかを調べる。
- ②韓国語話者が単純語アクセントの生成パタンとして多く見られる－3型や－2型の特徴が複合語の聞き取りにおいても現れるかを調べる。
- ③日本語とは違って韓国語は音節言語であるが、音節言語の背景を持つ韓国語話者は日本語アクセントを聞き取る際、音節構造に影響されているかを調べる。
- ④学習者の日本語発話において、母語の影響がどのように現れているかを調べる。

### 2.2 調査語

表1の調査語リストは『NHK日本語アクセント辞典』から、後部要素によって複合語のアクセントが決まる語例を複合語のアクセントに基づいて選び出したものである。

今回の実験では従来の複合語の種類をさらに細かく分けて調べることにする。

表1：調査語リスト

区分	複合規則	語例	語数
A型 <sup>(2)</sup>	後部要素が3拍以上の複合語で後部要素の第1モーラにアクセント核を置く	電話番号、学校教育、家族関係etc.	10
B型	後部要素が3拍以上の中高型で複合語は後部要素のアクセントを保存する	源氏物語、東日本、昭和天皇etc.	9
C1型	後部要素が1拍の漢語で、前部要素の末尾にアクセント核を置く	主治医、開花期etc.	11
C*1型	C1型と同じであるが、前部要素の末尾に特殊拍があるため、アクセント核が前に1拍ずれた場合	専門医、思春期etc.	11
C2型	後部要素が2拍の漢語で、前部要素の末尾にアクセント核を置く	公務員、読書会、言語学etc.	10
C*2型	C2型と同じであるが、前部要素の末尾に特殊拍で、アクセント核が前に1拍ずれた場合	銀行員、音声学、郵便局etc.	9
Preaccent-Ing型	後部要素が2拍以下の和語で、前部要素の末尾に核を置く	秋田犬、隅田川、大手町etc.	7
和語平板型	後部要素が2拍以下の和語で、複合語を平板化する	日本髪、箱根山、血液型etc.	11
漢語平板型	後部要素が1拍と2拍の漢語で、複合語を平板化する	社会科、韓国語etc. 体重計、世界中etc.	20
デフォルト型	後部要素が2拍以下の和語で、後部要素の第1モーラにアクセント核を置く	食事前、十日頃、回転窓etc.	9

## 2.3 インフォーマント

インフォーマントは韓国の大学で日本語を主専攻としている学生で、日本語の学習歴が平均2年の2年生を10名、学習歴が3年の3年生が10名である。いずれも慶尚道方言話者である。

## 2.4 調査方法

表1の調査語をランダムに配列したものを東京方言話者1名が録音し、その録音テープを騒音のない教室で学年別に一斉に聞かせ、聞き取れるアクセントを記入してもらった。それぞれの語は2回提示され、5秒後に次の項目が提示された。回答は、ひらがなで示された語句に下降の位置を観察するため、声の下がる部分に記入してもらった。その記述によるアクセントの変化を筆者が分析した。語の下降の位置の記入が調査語のそれと同じである場合に正解とした。

練習問題を用いて全体的なマークの付け方などについて説明した後に、テストに入った。実験は約25分間で行われた。

## 3. 結果分析

### 3.1 学年別正答率とアクセント型別正答率

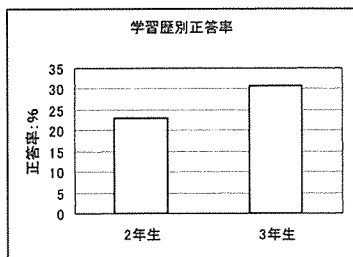


表2: 学年別正答率

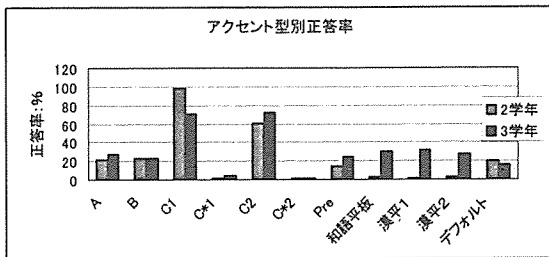


表3: アクセント型別正答率

表2は学年別の正答率を表したものである。2年生の22.99%、3年生は30.93%といずれも低い正答率を示している。分散分析を行った結果、学習歴による2年生と3年生の正答数には5%水準で有意差がみられた ( $t=2.491$ ,  $df=18$ ,  $p<.05$ )。

表3にはアクセント型別による正答率を示した。両レベルともに類似した結果を見せている。今回の被験者において、聞き取りやすいアクセント型と聞き取りに困難を感じるアクセント型がはっきり分かれている。C1型とC2型の正答率が高く、その中でも2年生の場合はC1型の正答率が最も高いが、3年生の場合はC2型の方が少し高

い数値を見せている。一方、両レベル話者ともにC\*1型やC\*2型の正答率は1%で、聞き取りが極めて困難であることがうかがえる。C\*2型の場合、C2型の場合と比べると、2年生の61%や3年生の72%との著しい差があり、C2型とC\*2型の間の聞き取り結果の差には注意を払う必要がある。C\*1型もC\*2型と類似した傾向がある。

### 3.3 アクセント型別分析

ここではアクセント型別の回答パターンを見て、学習者の聞き取り傾向について述べる。

#### 3.3.1 A型

表4：後部要素が3モーラの場合

回答パターン	2年生	3年生
-2型(0)	22.5	5
-3型(100)	47.5	67.5
-4型(0)	27.5	15
-5型(0)	2.5	0
平板型(0)	0	10
2核型 <sup>(3)</sup> (0)	0	2.5
じゆう+しろう(自由思想)		

表5：後部要素が4モーラの場合

回答パターン	2年生	3年生
-2型(0)	10	3.3
-3型(0)	7.5	81.7
-4型(100)	6.7	0
-5型(0)	6.6	11.6
平板型(0)	0	1.7
2核型(0)	1.7	1.7
でんわ+ばんごう(電話番号)		

(回答パターンとは学習者によって表れたアクセント型で後ろから数えて何番目に核があるかを表している。( )の中の数字は調査語アクセントの頻度率である。単位は%。7.5は回答率の一番高いことを示す。最下段は調査語例である。)

表4は3モーラの後部要素が結合したA型を聞いた際の回答パターンの数値を、また表5は4モーラ語が後部に結合したA型の回答パターンの数値を百分率で表したものである。

表4は音刺激である-3型に対して、2年生の場合は47.5%が-3型という回答で一番多く、次が27.5%の-4型、-2型の22.5%となっている。

両学年ともに-3型の回答が多いことは共通しているが、数値には差が見られる。-3型の音刺激に対して、2年生の場合は、47.5%が-3型で一番多く、その次の-4型と-2型の間の回答率の差は少ない。一方、3年生の場合は67.5%で2年生のそれに比べると圧倒的に-3型の回答が多い。-3型の次に-4型が15%を占めている。

2年生の回答を見ると、-3型という回答が最も多いが、-2型の回答も少なくない。-2型とは語末が特殊拍の場合はその特殊拍を含む音節内に下降が生じると聞いているものである。

表5を見ると、-4型の音刺激に対して、-3型の回答が多い。これは後ろから3モーラ目に特殊拍があるため、自立拍がくる場合には結果は変わってくる可能性がある。また、表4での-3型の回答より、表5での回答率がより高くなっている。2年生の場合は表4の-4型の回答とは違って回答率が低くなり、むしろ-2型の回答が多い。3年生の場合、-4型の回答が0%であるのも特徴的である。

このことは、特殊拍の有無と関係があることを示唆していると思われる。

### 3.3.2 B型

表6：特殊拍を含む場合

回答ボタン	2年生	3年生
-2型(100)	11.6	13.3
-3型(0)	71.7	38.3
-4型(0)	13.3	20
-5型(0)	0	5
平板型(0)	1.7	18.3
2核型(0)	1.7	5
ひがし+にほん(東日本)		

表7：特殊拍を含まない場合

回答ボタン	2年生	3年生
-2型(0)	13.3	0
-3型(100)	50	43.3
-4型(0)	33.3	26.6
平板型(0)	0	10
2核型(0)	0	3.3
その他(0)	3.3	16.6
げんじ+ものがたり(源氏物語)		

表6は、アクセント核の後に特殊拍のある場合を、表7はアクセント核の後に自立拍の続く場合の学習者の回答ボタンを表したものである。表6を見ると、-2型の音刺激に対して-3型の回答が両方とも多いことがわかる。特に、2年生の場合は71.7%で圧倒的に多く、-2型の回答は11.6%で-4型の回答に続いて3番目である。3年生の場合は、2年生ほど-3型の回答率が低い反面、-2型と-4型に続いて平板型の回答が多くなっている。平板型と-2型の回答率との差が少なく、平板型と-2型の間にゆれがあると思われる。以上から、2年生と3年生の回答結果で一番回答率の高いアクセント型は一致しているが、下位の順番を見るとそれぞれ差が見られる。つまり、2年生と3年生の間には聞き取りボタンにそれぞれ違う傾向があると思われる。

「東日本」/ひがし+にほん/を-4型で回答するのは、表4、表5、表6、表7からわかるように、語が結合している境界にアクセント核があると知覚しているものと見ることができる。

表7では、後部要素が自立拍の場合は知覚しやすいことがわかる。

### 3.3.3 C1型

表8は1モーラの漢語が後部要素に来て接辞的に結合する語のアクセントを聞いた場合の回答をまとめたものである。

音刺激の-2型に対して2年生の89%、3年生の64.5%が-2型で回答している。いずれも高い数値である。つまり、複合語が結合しているところとアクセント核のあるところが一致しているC1型のような複合語の場合、アクセント核の聞き取りが容易であることがわかる。ただし、2年生は-2型に回答が固まっているが、3年生はそれほど一律ではなく平板型の回答も20.9%で多く見られる。3年生の場合は語末の方に核がある場合、平板型として聞き誤る傾向があると思われる。

表8：C1型の回答パタン

回答パタン	2年生	3年生
-2型(100)	89	64.5
-3型(0)	5.5	10.9
-4型(0)	0	1.8
-5型(0)	0	0
平板型(0)	5.5	20.9
2核型(0)	0	1.8
しゅじ+い(主治医)		

表9：C\*1型の回答パタン

回答パタン	2年生	3年生
-2型(0)	97.2	78.1
-3型(100)	0.9	3.6
-4型(0)	0.9	11.8
平板型(0)	0.9	6.4
うんでん+し(運転士)		

### 3.3.4 C\*1型

表9は音韻の規則によってアクセント核が前にずれた場合の回答パタンを表したものである。

両学年とも-2型の回答が多いが、3年生の場合は-4型の回答も多く見られる。

しかし、1拍の後部要素が接辞的結合をしていることで語構成が同じである表6の結果と比較すると、表6では2年生の89%、3年生の64.5%が-2型で回答しているのに対し、表7では2年生の97.2%、3年生の78.1%が-2型で回答している。音韻の規則によりアクセント核がずれたC\*1型においてC1型と同じく-2型で聞くことは語構成が聞き取りに影響していることを裏付けているものである。

以上より、C1型とC\*1型は語の複合構成が同じであるが、実際のアクセント型は違っている。ところが、学習者は両アクセント型の差が聞き取れず、同じパタンとして聞いていることがわかる。音節言語をその背景とするインフォーマントには特殊拍によるアクセント核のずれは最も聞き取りにくい型であると思われる。

### 3.3.5 C2型

表10：後部要素が特殊拍を含む場合

回答パタン	2年生	3年生
-2型(0)	35.7	17.1
-3型(100)	62.9	72.9

表11：後部要素が自立拍の場合

回答パタン	2年生	3年生
-2型(0)	36.7	20
-3型(100)	60	70

-4型(0)	0	1.4
-5型(0)	0	1.4
平板型(0)	1.4	5.8
2核型(0)	0	1.4
かんこく+じん(韓国人)		

-4型(0)	3.3	3.3
平板型(0)	0	3.3
2核型(0)	0	3.3
げんご+がく(言語学)		

表10は後部要素に特殊拍を含む2モーラ1音節の語が結合した場合の回答ボタンを、表11は、後部要素が2モーラ2音節、つまり自立拍の場合の回答ボタンを表したものである。

表10や表11において両学年ともに-3型の回答が多く、次に-2型が多い。C2型のような音刺激には3年生の方がそれぞれ72.9%と70%で2年生より回答率が高い。2年生の場合、後部要素の語音構成のかかわらず-2型の回答が多く見られる。一方、3年生の場合は平板型としての聞き誤りも見られる。C2型も語の境界とアクセント核の位置が同じで、後部要素が特殊拍を含むか否かに関わらず、最も聞き取りやすいことが言える。

2年生の場合に-2型の回答が多いのは、1音節の語を2モーラで発音し、音節内に下降調と上昇調を持つという慶尚道方言独特<sup>(4)</sup>のアクセントが影響していると思われる。しかし、このような独特のアクセントがすべての聞き取りにおいて働いているわけではなく、聞き取りする際にメリットとしても、逆にデメリットとしても現れる。3年生の場合は母語の干渉が少なくなるため、2年生に比べて-2型としての回答は少ない。

### 3.3.6 C\*2型

表12：後部要素が特殊拍を含む場合

回答ボタン	2年生	3年生
-2型(0)	12.5	7.5
-3型(0)	4.9	6.0
-4型(100)	1.2	0
-5型(0)	0	2.5
平板型	0	2.5
2核型	0	2.5
うんどう+かい(運動会)		

表13：後部要素が自立拍の場合

回答ボタン	2年生	3年生
-2型(0)	20	3.3
-3型(0)	7.6	9.0
-4型(100)	0	3.3
2核型(0)	3.3	3.3
しちょう+りつ(視聴率)		

表12には後部要素が2モーラで特殊拍を含む複合語が音韻の規則によってアクセント核が前にずれた場合の回答ボタンを表している。-4型の音刺激に対して、両学年とも-4型の回答はあまり見られない。3年生の回答は0%である。韓国語話者には

音節内での下降の聞き取りが困難であることを裏付けている。

両学年とも－3型の回答が最も多いが、3年生の方は60%で回答が偏っている。2年生の場合に－3型の回答は3年生より低いが、－2型の回答は多い。一方、3年生の場合、2年生の回答では現れない－5型、平板型、また、2核型の回答がわずかであるが見られる。しかし、これらの回答パターンについては個人差を排除することはできない。

表13は音韻の規則によってアクセント核が前にずれた複合語の、後部要素が特殊拍を含まない2モーラ2音節の場合の回答パターンを表したものである。

ここでもやはり－3型の回答が多いが、表12より回答率が高くなり、3年生の場合は90%に上っている。2年生の場合は－3型の回答が多くなるだけでなく、－2型の回答率も高くなっている。表12では現れなかった2核型の回答が見られ、逆に－4型の回答がなくなった。それは、後部要素が自立拍で1モーラが1音節として数えられるため、語末から2音節目にアクセント核を置く傾向が見られる。これは末尾から2音節目に下降現象が起こる韓国語の干渉によるものであると思われる。

3年生の場合は表12の結果に比べて回答パターンがまとまっていることがわかる。

C\*2型のように、語の境界とアクセントの境界がずれている場合は聞き取りにくい傾向があり、また、後部要素に特殊拍がない場合に回答パターンがより偏るのは、後部要素が特殊拍を含むか含まないかが聞き取りに影響していることが推測できる。

### 3.3.7 preaccenting型

表14：前部要素の末尾に核がある

回答パターン	2年生	3年生
－2型(0)	68	54
－3型(100)	28	30
－4型(0)	4	8
－5型(0)	0	2
平板型(0)	0	6
すみだ+がわ(隅田川)		

表15：アクセント核が前にずれた場合

回答パターン	2年生	3年生
－2型(0)	40	10
－3型(0)	55	85
－4型(100)	0	0
－5型(0)	0	5
2核型(0)	5	0
せんでう+うた(船頭歌)		

表12は後部要素が2モーラで前部要素の末尾にアクセント核のある場合の回答パターンを表したものである。両学年とも、－3型の音刺激に対して－2型で回答している。

－2型の回答においては2年生が68%で3年生の54%より高い。ところが、－3型の回答を見ると、3年生が30%、2年生が28%でわずかであるが3年生の方が高い。



また、3年生の場合は平板型の回答も見られる。韓国語には平板型があまり見られないが、3年生の場合に平板型の聞き誤りがあるのは、中間言語的要素として見ることができる。

表13は後部要素が2モーラで、かつ前部要素の末尾が特殊拍であるため、前に1拍ずれた場合の回答パターンを表したものである。両学年ともに-3型の回答が多く、その次に-2型の回答が多い。しかし、やはり-3型の回答では3年生が圧倒的に多い。

Preaccenting型とアクセント型や語構成が類似しているC2型と比べると、preaccenting型の聞き取りの精度が低いことが分かる。両方とも-3型の回答が多くなるはずであるが、preaccenting型においては-2型の回答が多いのは何故だろう。語の境界とアクセントの境界が一致しているにも関わらず、-2型が多くなるのは両型が結合している語の性質が違うためである。つまり、C2型の後部要素は自立性の低い語が接辞的な結合をしているのに対して、preaccenting型の後部要素は「川」「町」などと自立性が高いため、後部要素まで注意が引かれ、語末から2音節目に下降が生じると聞き取っていると思われる。やはり母語の影響であると思われる。

### 3.3.8 和語の平板型

表16：後部要素が1モーラの場合

回答パターン	2年生	3年生
-2型(0)	32.5	12.5
-3型(0)	6.5	5.0
-4型(0)	0	5
-5型(0)	1.2	2.5
平板型(100)	1.2	27.5
2核型(0)	0	2.5
うきよ+え(浮世絵)		

表17：後部要素が2モーラの場合

回答パターン	2年生	3年生
-2型(0)	76.7	40
-3型(0)	16.7	33.3
平板型(100)	6.6	26.7
きんむ+さき(勤務先)		

表16には1モーラの後部要素が結合して平板型になる語を聞いた場合の回答パターンを表している。両学年とも-3型の回答が最も多い。2年生は-3型の次に-2型が多い。しかし、音刺激である平板型の回答はきわめて低い。

一方、3年生の回答を見ると、-3型の次に平板型が27.5%で回答数が高い。ここでも3年生はその他に-2型、-4型が見られ、やはり回答にばらつきがある。

表17は後部要素が2モーラ2音節の場合の回答パターンを表したものである。両学年ともに-2型の回答が多く、次に-3型の回答が多い。しかし、2年生の場合、-2型が76.7%で高い比率を示すのに対し、3年生の場合は-2型が40%、-3型が33.3

％、さらに平板型が26.7％で大した差は見られない。－2型の回答が圧倒的に多いのは2年生の特徴的な傾向である。

表16と表17は、後部要素の長さが違っているが、学習者の回答パターンも後部要素の長さによって異なっている。

2年生の場合、平板型の回答はほとんど見られない。慶尚道方言の場合、名詞のアクセントだけでなく、動詞などのアクセントも似ていて、なお－2型になる傾向があるため、初級の2年生は－2型で聞き取っていることと思われる。より学習の進んだ3年生の場合は平板型の回答が多く見られ、2年生より平板型に耳慣れているものと考えられる。

### 3.3.9 漢語の平板型

表18：後部要素が1モーラの場合

	2年生	3年生
－2型(0)	97	60
－3型(0)	1	2
－4型(0)	0	5
平板型(100)	2	32
その他(0)	0	1
しゃかい+か(社会科)		

表19：後部要素が2モーラの場合

回答パターン	2年生	3年生
－2型(0)	40	11
－3型(0)	58	55
－4型(0)	0	3
－5型(0)	0	3
平板型(100)	2	28
けいじ+ばん(掲示板)		

表18は1モーラの漢語が複合語の後部に結合した平板型を聞いた際の回答パターンをまとめたものである。後部要素が1拍であることで－2型の回答が著しく高い。特に2年生の場合は97％にも上る。一方、3年生の場合、－2型は60％で回答が多いが、次の平板型も32％で割に高い。

表19には後部要素が2モーラの場合の回答パターンを表している。後部要素が2モーラであることで－3型の回答が最も多い。次に多い回答を見ると、2年生の場合は－2型の回答が40％と回答率が高い。3年生の場合、平板型が28％で次に多い。

同じ音刺激において一番多い回答は同じであるが、その次に多い回答は学年別に異なり、2年生は－2型が、3年生は平板型の回答がそれぞれ多いことがわかる。学年別に聞き取りパターンに差がみられる。

表18と表19を比較すると、後部要素が1拍の場合には－2型に偏った回答を示しているが、後部要素が2モーラの場合はばらつきが多い。それは、後部要素が2モーラの場合、特殊拍を含む場合もあるためである。以上のことをまとめると、アクセント

の知覚において後部要素の長さと言音構成が影響していることが言える。

また、表8や表9、表11と比較すると、数値の差はあるものの回答パターンは類似していることがわかる。このようにアクセントの違う複合語を同じアクセント型として聞いているのは、言い換えれば、アクセントを聞きながら、文字を通して学習した複合語の構成に影響を受けていること、また音節言語の背景を持つ言語話者であるため音節単位でアクセントを聞いていることが言える。

平板型の聞き取りにおいては3年生の方が知覚が高いことがわかる。なお、3年生の場合には後部要素の長さの如何によらず平板型が聞き取れることがわかる。

### 3.3.10 デフォルト型

表20：後部要素が2モーラ2音節の場合

回答パターン	2年生	3年生
-2型(100)	22.8	15.7
-3型(0)	75.7	67.6
-4型(0)	0	4.2
-5型(0)	0	4.2
平板型(0)	1.4	7.1
2核型(0)	0	1.4
とおか+ころ(十日頃)		

表21：後部要素が2モーラ1音節の場合

回答パターン	2年生	3年生
-2型(100)	20	20
-3型(0)	70	45
平板型(0)	10	35
にはん+じん(日本人)		

表20は後部要素が2モーラ2音節のデフォルト型の回答パターンを表したものである。

音刺激が-2型であるのに対し、-3型の回答が2年生は75.7%、3年生は67.7%と最も多く、次に-2型の回答が多い。やはり3年生の場合は回答にばらつきがある。

表21は後部要素が2モーラ1音節、つまり特殊拍を含む場合の回答パターンを表したものである。両学年同じく-3型の回答が多い。2年生の場合はその次に-2型が多く、3年生の場合は平板型が35%とその次である。2年生は-3型の回答が70%と偏っているが、3年生はゆれが見られる。

表20と表21を比べてみると、3年生の場合は-3型の回答率が67.6%から45%へと下がっている。なお、後部要素が特殊拍がある場合(表21)が自立拍の場合(表20)よりゆれが少ないことが分かる。これは、後部要素の語音構成が聞き取りに影響することを裏付けている。2年生の場合は、-2型の傾向がメリットとして影響している。3年生の場合に語末に下降があるアクセントを平板型と聞く傾向がまた現れている。

以上で、デフォルト型のような起伏式の複合語は、後部要素が自立拍の場合に下降の聞き取りが容易ではあるが、いずれの場合も-3型の回答が多いのは語の境界に下

降が起こると聞き取ることで、語音構成よりは語構成が深く関わっていることも見逃すことができない。

### 3.4 個人差

20人の被験者の中には、聞き取りに正答率が高い人と低い人との差が大きいが、被験者毎に全回答のアクセント型をみると、どの被験者も語の結合パターンに聞き取りが大きく関与されている傾向が強かった。アクセント型別の正答率は違うが、どの被験者も後部要素が1拍及び2拍の中高型の語、特に、語の境界とアクセントの境界が一致しているアクセント型の正答率が最も高い。しかし、正答率の高い被験者はそうでない被験者に比べ、平板型の聞き取りがとりわけ上手であることが明らかで、アクセント型の聞き取りには個人差があることが考えられる。

## 4. 考察

複合語アクセントの聞き取りの回答パターンをアクセント型別に分析すると、韓国語話者は実際のアクセントとは異なるアクセントとして聞き取っていることがわかった。学習歴による差もみられ、2年生と3年生の正答率に有意差が見られた。2年生と3年生はその回答パターンに差があることがわかった。2年生は-2型の回答があらゆるアクセント型で多く見られ、3年生の場合は-3型の回答が多く見られる。インフォーマントがテープで流れてくるアクセントとは違うアクセント型で回答するということは、実際より自分の耳に慣れている韓国語のアクセント型で聞いてしまう傾向があるからである。今回の結果で、複合語の語の境界にアクセント核があると認識する傾向があることがわかる。これはアクセントを聞く時に文字を通してすでに覚えた語構成がアクセントの聞き取りに影響を与えているものと想定される。

今回の回答パターンを見ると、韓国語話者に耳馴染んでいる-2型や-3型の場合、正答を含め回答数が多く、韓国語にあまり見られない平板型に対しては正答や回答も少なかった。音韻に関わる規則によってアクセント核がずれた語では、アクセント核の置かれる単位をモーラではなく音節で認識している韓国語話者にとって最も聞き取りにくいアクセント型であることも明らかになった。すなわち、韓国語話者の日本語アクセント習得のプロセスにおいて、聞き慣れないアクセント型に対しては母語の似通ったアクセントに置き換えてしまうのである。

本稿では慶尚道方言話者が日本語を聞く際、聞き取りが容易なアクセント型と困難

なアクセント型を明らかにし、その原因についても追求することができた。なお、アクセントの聞き取りの際、音韻的刺激以外に語構成も深く関与することが明らかになった。

## 注

- (1) 慶尚道方言のアクセントは高低アクセントであり、アクセントの型の区別は、日本語の場合と同じように声の高さの時間的変化によって行われる。(早川1999)
- (2) A型、B型などの用語は今回の実験のために便宜的に作ったものである。
- (3) 一語内に上昇や下降が2度あると回答しているパターンを2核語と呼ぶことにする。
- (4) 慶尚道方言には1音節内における声の急激な上昇をその特徴とする複合調があって、慶尚道方言の特異な型である。このような慶尚道方言の複合調を低調と高調の並び置きと考え、その音調は2モーラと考える。(早川1999)

## 【参考文献】

- 鮎澤孝子・西沼行博・李明姬 (1995) 「外国人日本語学習者による東京語アクセントの聴き取り—フランス人、中国人、韓国人データの考察」『日語日文研究』27号, pp.227-239
- 鮎澤孝子 (1999) 「中間言語研究—日本語学習者の音声」『音声研究』第3巻第3号, pp.4-12
- 李炯宰 (1991) 「韓国人の日本語学習者の音声教育に関する研究—発音および聞き取り上の問題点を中心に—」『日本語と日本文学』12号, pp.21-38
- 大西晴彦 (1991) 「韓国人の日本語アクセントについて」『国際学友会日本語学校紀要』15号, pp.52-60
- 菅野裕臣 (1972) 「朝鮮語慶尚道方言アクセント体系の諸問題」『アジア・アフリカ語学院紀要』
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『講座日本語と日本語教育 第2巻日本語の音声・音韻(上)』明治書院, pp.233-265
- 杉藤美代子 (1987) 「音節か拍か」『講座日本語と日本語教育 第2巻日本語の音声・音韻(上)』明治書院, pp.164-177
- 助川泰彦・佐藤 滋 (1994) 「韓国人学習者の日本語アクセント知覚における音節構造の影響」『東北大学留学センター紀要』第2号, pp.27-32
- 多和田眞一郎 (1985) 「日本語音声の聴取に関する考察」『日本語学校論集』12号
- 中東靖恵 (1999) 「韓国語母語話者の英語音声と日本語音声」『音声研究』第2巻第1号, pp.72-

- NHK放送文化研究所編（1999）『NHK日本語発音アクセント辞典』
- 福井玲（2001）「韓国語のアクセント」『音声研究』第5巻第1号,pp.11-17
- 早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』大修館書店
- 松崎寛（1999）「韓国語話者の日本語音声—音声教育研究の観点から—」『音声研究』第3巻第3号,pp.26-35
- 関光準（1989）「韓国語慶尚道方言の1音節名詞におけるアクセント型の音響的分析と合成音声による知覚実験」『朝鮮語教育研究』第4号,pp.93-106
- 関光準（1990）「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」『講座日本語と日本語教育 第3巻 日本語の音声・音韻（下）』明治書院,pp.303-331
- 山田幸宏（1963）「朝鮮人の日本語音認知における難易度の測定について」『日本語教育』,pp.19-33

（名古屋大学大学院博士課程後期）